

家畜も暑さは苦手です

みなさん

も、暑さが続くと食欲が落ちて夏バテしますよね。家畜も同じで、

食欲が減り体重が増えません。鶏の場合、

現在よりも約3度気温が上昇すると、西日本などの一部の地域では8月の産肉量が15%程度も低下すると予測されています。また、豚の研究では、1日の平均気温が27.5度を超えると餌を食べる量が減り、1度高くなるごとに体重の増加が55グラム低下すると

の報告もあります。こういった体重の増加が悪くなることには、胃腸の働きが低下することや、体温調節の仕組みも関連しています。高温時には体の熱を外に発散するために汗を多くか



みどりパパ

たり、呼吸回数や体を巡る血液の量が増えてエネルギーを消費します。このため体重の増加にエネルギーがまわらなくなってしまうのです。

その他の高温による影響としては、乳牛の乳量や鶏の卵を産む量が減少することや、豚や牛が妊娠しにくくなること、げられます。また、熱帯や亜熱帯地域にすむ蚊などの生息域が温暖化によって北上し、これらが媒介する病気の発生が心配



されます。

暑さ対策

では、どのような暑さ対策が取られているのでしょうか。
畜舎では送風や散水、細かい霧を発生させ、家畜の体を冷やしています。みなさんが扇風機を使ったり、水浴びをするのと同じですね。また、アメリカでは冷房を牛舎に備えるところや日本でもスポットクーラーによる冷風施設を



備える牛舎もあります。消化しやすく栄養価の高い餌をあたえることも必要となります。また、牛の種類によって暑さに耐えられる力が違います。黒毛和種はホルスタインよりも暑さに強く、さらに主に熊本や高知で飼われている褐毛和種はもっと暑さに強い品種です。

牛のゲップ中のメタンを抑制

一方、家畜も温暖化にかかわっていることを知っていますか。

反芻動物は4つの胃を持っており、第1胃では微生物の力を借りて草を発酵して栄養としています。この微生物の発酵の過程でメタンが発生し、ゲップとして排出されます。メタンは温暖化ガスの一つであり、二酸化炭素について影響の大きいものとされているので、家畜からのメタンガス発生を抑制する技術の開発も進められています。